

特集

# お山の学校 開校

長田地区に開校した田舎生活体験宿泊施設「お山の学校ながた」。

元・長田小学校の校舎を再整備したこの施設は、

過疎化が進む地域を元気にしたい、という

住民の皆さんの強い願いから誕生しました。

地域にとって大きな問題である

学校の閉校と、その後の校舎の活用。

この課題に向き合い、

新たな一歩を踏み出した

長田の皆さんの思いに迫ります。





40年以上にわたり長田小学校と交流を続ける  
松山市立味酒小学校・現PTA副会長 玉井利久さん

長田小学校が閉校になった後も、自治会の皆さんから「交流を続けたい」とラブコールをいただき、味酒小学校のPTAが中心となって活動を継続しています。子どもたちに人気なのはカブト虫捕りや川遊び。そして何より、毎年「おかえり」と迎えてくれる地域の皆さんの人柄が、また訪れたい気持ちにさせてくれます。

よみがえった にぎわい

# 山々に笑い声がこだまする

開校から2カ月。お山の学校には、すでに100人を超える利用者が訪れています。自然の恵みに触れ、昔ながらの生活体験を楽しむ——そんなお山の学校の様子を紹介します。



1\_ 8月18～19日に開かれた味酒小学校との林間学校。町内からは小学生8人が参加 2\_ 流しそうめんに使用した竹は、みんなで山から運んで帰ったもの。苦労した分、おいしさも格別 3\_4\_ 石窯で焼くピザは子どもたちに大人気 5\_ 早朝のカブト虫捕り。予想以上の収穫に驚くほど 6\_ 長田地区には水遊びできる川はないものの、近隣の川での川遊びは子どもたちの夏の楽しみの一つ

8月18～19日、松山市立味酒小学校の児童と保護者21人がお山の学校を訪れました。同校と長田小学校は、昭和38年から交流活動を実施。長田小の閉校後は、味酒小PTAと長田自治会が引き継ぎ、夏休みの林間学校として活動を続けてきました。この40年以上にわたる交流の実績が、現在のお山の学校の土台を築いています。

開校から2カ月。お山の学校には大人から子どもまで、たくさんの人たちが訪れています。そして小学校の閉校後、子どもたちの笑い声が聞こえなくなっていた長田地区に、今また楽しそうな笑い声が響き始めています。

地域によみがえった笑い声

ザ作り体験、また直径140センチ×深さ120センチの巨大五右衛門風呂での入浴などユニークな体験もあります。

これらの活動の先生役を務めるのは、地元の住民の皆さん。体験を通じた人と人の交流もお山の学校の魅力です。

長田の田舎暮らしを体験

緑深い山々に囲まれた長田地区。ここに7月2日、田舎生活体験宿泊施設「お山の学校ながた」が開校しました。同施設は、平成16年に閉校となった元・長田小学校の木造校舎を再整備したもの。運営は地元住民で構成する「まめなぎ会」・太田利栄会長、他15人の皆さんが担います。

施設内は木造校舎の面影を残した木の温もりが感じられる造り。もちろんテレビなどの娯楽設備はありません。聞こえるのは風の音と鳥や虫の声。街の喧騒を離れ自然の中で過ごすひとときに、心身が癒やされます。

お山の学校の自慢の一つはまめなぎ会女性部の皆さんが腕を振るう旬の田舎料理。郷土の味にこだわり、新鮮な地元食材をふんだんに使って作ります。そしてもう一つの自慢は、長田の昔ながらの暮らしや文化に触れることができるさまざまな体験メニュー。田植え・稲刈りなどの農業体験、石臼で大豆をひいて作る豆腐作り体験や石窯で焼くピザ作り体験、また直径140センチ×深さ120センチの巨大五右衛門風呂での入浴などユニークな体験もあります。



◎住民手作りの体験設備

住民が汗を流し手作りしたユーモアと工夫がいっぱいの体験設備 4\_ 石臼で大豆をひき、豆乳を搾って作る豆腐作り体験 5\_ 石窯で焼くピザ作り 6\_ 子どもなら10人は入れる巨大な五右衛門風呂

◎素朴で温もりある宿泊施設

1,2\_ 木造校舎の面影を残す廊下や教室。宿泊室は2室で、各室10人まで利用できる 3\_ 夕食は地元の畑で採れた新鮮な野菜が中心。季節によって変わる献立も楽しみの一つ。また自炊も可能





1,4\_郷土料理のバザーなどが行われる「長田食の文化祭」 2,3\_必要な設備は自分たちの手で。自慢の窯場は屋外活動の拠点

長田地区ではこれらの取り組みを、行政の補助金にほとんど頼ることなく自分たちの力で進めてきました。ピザ用の石窯や囲炉裏など活動に使用

学校の再生を通して地域の新生を目指す。長田地区の新たな挑戦が始まっています。

平成18年には愛媛大学文学部地理学教室と共催し、各家庭に受け継がれてきた料理を持ち寄って「第1回長田食の文化祭」を開催。これが郷土の食文化を見直すきっかけとなり、「食」をテーマにした地域づくりが始まりました。翌年から文化祭はバザー形式で開かれるようになり、今では町内外から大勢が足を運ぶ一大イベントに成長しています。

用する設備の多くは、住民が汗を流し力を合わせて作ったもの。「行政の支援を待っていただけではなかなか前に進めない。自分たちでできることからやろう」。こうした活動が、互いの絆を強め、地域づくりへの自信にもつながっています。

このような住民の皆さんの強い思いと熱心な取り組みを受けて、町は23年度、国庫補助を活用し元長田小学校校舎を整備。住民有志で構成するまめなぎ会が指定管理者となり、今年7月、「お山の学校ながた」は開校しました。

# お山の学校 開校までの道程 学校を、もう一度 コミュニティの拠点に



1\_昭和35年の長田小学校運動会 2\_葉たばこ畑が広がる長田地区(平成2年)。この頃は後継者世代のUターンが多く、子どもの人数も増加していた 3\_平成15年度、長田小学校最後の在校生たち



## 長田小学校の変遷

葉たばこ栽培や酪農など、古くから農林業が中心であった長田地区。ここに最初に小学校ができたのは明治7年のこと。同29年に五百木第二尋常小学校が新設され、昭和28年に独立校としての長田小学校が誕生しました。

同39年には、ため池を住民の手で改修し、町内第1号となるプールが完成。多くの団体が視察に訪れ、注目を集めたといえます。

しかし時代の変化に伴う少子高齢化の波を避けることはできず、集落の人口は昭和40年から平成12年までの35年間に37割にまで激減。多い時は100人を超えた長田小学校の在校生も年々減少し、平成15年度にはわずか10人に。そ

して平成16年3月31日、同校は立川小学校と大瀬小学校に統合され閉校となりました。校舎活用の取り組み

教育の場としてはもちろん、地区のコミュニティの拠点でもあった長田小学校。住民の皆さんは、何とか学校を有効に活用する方法はないかと模索してきました。

その一つとして取り組んできたのが先述した昭和38年から続く味酒小学校との交流活動です。閉校後、一度は途切れそうになったものの、同校に強く働きかけ、夏休みの林間学校として継続。同校の児童や保護者を迎え、学校を舞台に、町内の子どもたちや地元の人々との交流を図っています。

## 人が集まり、交流できる場所

### お山の学校を拠点に 長田を元気にしていきたい

長田小学校の閉校後、住民の中には「学校を何とかしたい」という思いが強くありました。学校はコミュニティの拠点。住民みんなが集まることのできる場であり、子どもたちの声は地域を活気づけてくれました。だからこそ閉校後も、子どもたちが集まる場所にした、長田に住む人や長田を訪れる人たち同士が交流できる場所にした、そんな思いから「お山の学校ながた」をスタートしました。

開校から2カ月。まだ分からないことも多く、課題もあ

ります。でも最初から無理をしても息切れしてしまうだけ。自分たちができるように一歩ずつ進んでいくしかない。ません。

現在、運営はまめなぎ会のメンバーが行っていますが、将来は食材の提供、体験活動の受け入れや支援など、地域全体にこの取り組みを広げ、みんなが関わっていきけるようにしていくことが目標です。地域の皆さんの協力を得ながら、ここを拠点に、長田が元気になる取り組みを展開していきたいと思っています。



長田自治会/まめなぎ会  
会長 太田利栄さん(57)

# Nagata's Hospitality

お山の学校を訪れる人たちを迎えるのは  
長田に暮らし、長田を愛する人々  
ここにしかないもてなしを目指します

## お山の学校の隅々まで心を配る

大森一繁さん(68)



長田小学校の閉校後グラウンド横の家に引っ越し、校舎の管理などを行ってきました。お山の学校でも管理人を務めています。また本業の炭焼きを生かし、体験活動などの際は「窯じい」として活動。その他、できることは何でもやります。とにかくまずは1年間、さまざまなことを勉強しながらお山の学校を軌道に乗せていきたいです。

## 百姓の楽しさを味わえる体験を

中田兼好さん(67)



わが家は昔から長田で農業を営んでおり、私も子どもの頃から当たり前のように牛で田んぼをかくなど農作業の手伝いをしていました。そして子や孫たちも自然に手伝ってくれました。農業体験といっても特別なことをするのではなく、その季節に応じた作業を、一緒に行うことができればと思います。百姓を楽しんでほしいです。

## 地元の材を使った器を制作

加藤 毅さん(38)

大分県湯布院町で3年間木地師の修行を積み、5年前に長田へ移住しました。「山が生き、川や海が生きて人が生きる。地元の材を使い地域に還元できる仕事をしろ」という師の言葉を胸に、お椀やしゃもじなど食卓に関する品を作っています。お山の学校で使うコーヒーカップなどの器も制作。将来は木工体験なども受け入れていきたいです。



## 長田の家庭の味でもてなす

松尾カツ子さん(70)、信高一コさん(74)、大森源恵さん(70)

宿泊客の皆さんにお出しする食事作りは、まめなぎ会女性部の4人が交代で担当しています。献立は普段から長田の家庭で食べられている旬の田舎料理。郷土の食文化を生かし、できるだけ地元の食材にこだわって作ります。そしてもう一つ大切にしているのは、学校に着いた時のお迎えと帰る時のお見送り。訪れた人に、自然の中で、のんびりと気持ちよく過ごしてもらえたら嬉しいです。



挑戦のはじまり

# 長田の日常をもてなしに

開校したお山の学校。大切なのは、10年、20年先も継続して運営されコミュニティの拠点となっていること。そのためには「何度でも訪ねたい」と思ってもらえるようなホスピタリティー(もてなし)が不可欠です。長田の人々が目指すもてなしとは――

長田の日常は魅力の宝庫

お山の学校を運営する「まめなぎ会」の名前の由来となっているまめなぎ峠。長田の天辺にあるこの峠からは、晴れた日の夜、満点の星空を眺めることができます。人工の光もなく、遮るものもない峠から見上げる、見渡す限りの星空。まるで夜空を独り占めしているような、ぜいたくな時間です。

長田地区には、こんなぜいたくな時間を過ごすことのできる自然が数多くあります。そして、その中で育まれてきた昔ながらの生活文化を大切に受け継ぎ、それを伝えることのできる人も多くいます。

戦後、目覚ましい経済成長を遂げた日本。便利さが優先され、物質的な豊かさがもたらされる一方で、ともすれば心の豊かさは置き去りにされてきました。いま「田舎生活」にあこがれて訪れる人が求められるのは、心のぜいたく。豊かな自然や美しい風景、澄んだ空気、新鮮な食材など、住んでいる人にとっては当たり前前にあるものが、訪れる人にとっては大きな魅力。さらに田畑で収穫した作物を使い手間をかけて行う豆腐、みそ、こんにゃくなどの加工品作り、山の木を使った薪や炭、木製品を使用する生活など、その土地ならではの昔ながらの暮らしや文化に触れられることが、他では味わうことのできない貴重な体験となります。

ここにしかない「もてなし」を

長田の日常を生かし、訪れた人に「また来たい」と思ってもらえるような、長田にしかない「もてなし」を提供できるかどうか。それが10年、20年先の、お山の学校と長田地区発展のカギになります。小さな地域だからこそ、適度な距離感を大切にしつつ必要な時には手をつなぎ合って生活してきたという長田地区の人々。まめなぎ会の皆さんは、お山の学校を訪れる人たちに對しても、そんな気持ちで迎えたいといっています。長田の皆さんがつくる、心を込めた、温もりのある長田らしいもてなしが、地域の可能性を高めていきます。